

2014 American College of Rheumatology/ Association of Rheumatology Health Professionals (ACR/ARHP) Annual Meeting

小倉 剛久

東邦大学医学部内科学講座膠原病学分野 (大橋)

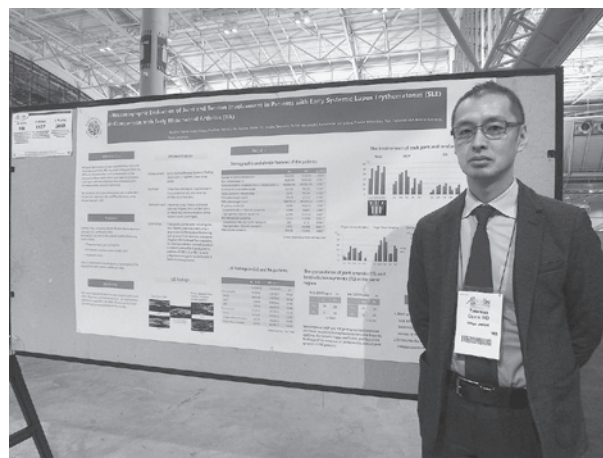


2014年11月14～19日にアメリカ、ボストンで行われた2014 American College of Rheumatology/Association of Rheumatology Health Professionals (ACR/ARHP) Annual Meetingに参加する機会に恵まれたので報告する。

ACRは長らくリウマチ膠原病領域で疾患の分類基準を策定するなど、中心的な役割を果たしてきた学会である。近年、ヨーロッパリウマチ学会 (European League Against Rheumatism: EULAR) の勢いは目覚ましく、各疾患における新しい分類基準は合同で作成されるようになったが、依然、世界中から多くの参加者が集まるリウマチ膠原病領域最大規模の国際学会である。

東邦大学医学部内科学講座膠原病学分野 (大橋) からは亀田教授、平田医師、林医師、筆者の4名で参加した。ボストンと言えばアメリカ発祥の地として知られ、また大学の多く集まる街でもあり、アメリカの中では比較的治安が良い場所といわれている。われわれの訪れた数日前には初雪も見られたようで、真冬の寒さを体験することとなった。

今回は2つの大きな目的があり、まずは“pre-meeting courses”で行われた筋骨格系超音波検査のハンズオンセミナーに参加することであった。あまり関節に超音波検査というのも馴染まないように思われるが、機器性能向上に伴い、表在の構造・病変が分かりやすくなったことやドプラ法による血流評価の精度が上がったことで、画像検査の1つとして近年リウマチ領域でも広まってきている。ハンズオンセミナーは全身の主だった関節に関して、全体でのレクチャーと少人数に分かれての実技実習を丸々2日間、朝から夕方まで繰り返し行うコースである。リウマチ領域の超音波検査はヨーロッパが先行しており、こういった実技コースも古くから行われているが、アメリカや日本では特にここ数年盛んになってきた。日本でも同様な実技コース



ポスター会場にて



ロブスターを前に

を学会で行っており、筆者も実際に参加したりインストラクターとして参加する機会を頂いているが、やはり他国ではどのように行っているか、そして何か新しい発見はない

かと楽しみであった。筆者の参加した実習グループは他にアメリカ人2名(コメディカル)と、オーストラリア人(医師)の計4名だった。グループ内でのディスカッションを通してそれぞれの国の事情や立場の違いなどを垣間見ることができ、とても興味深いものがあった。また日本ではなかなか実習を行う機会がない股関節が勉強出来たことは貴重な経験となった。同時に、内容は日本で行うことと大きな相違がないこと、また自分の技術に大きな相違がなかったことを確認出来たのは自信の1つとなった。

さらに“scientific sessions”(こちらが本番)で、全身性エリテマトーデスと関節リウマチの関節や腱病変について超音波検査を用いて比較検討するという内容をポスターで

発表した。東邦大学医療センター大橋病院膠原病リウマチ科では超音波検査を診療のみならず研究課題の1つとして取り組んでおり、林医師も診察所見と超音波検査所見の比較についてポスター発表を行った。日本のリウマチ学会でもポスターの前に立って質疑応答に応える形式となって久しいが、全体的な会場の狭さなどもあり、なかなかディスカッションとなることは多くない。しかし今回は違った角度からの意見がいろいろと聞けて参考になるとともに、好意的な意見も多く頂き今後の励みとなった。

ご指導頂いた亀田教授はじめ医局員一同に深謝しつつ、今回の貴重な経験を生かし、臨床に研究に精進していきたいと思う。